

12. 穂肥

【穂肥の時期】

出穂25日前は、12葉期にあたります。この時に遅れないように『穂肥』を施して、穂を充実させ、収量を確保します。

この米作りでは、初期にチッソ肥料を効かせず、じっくりと作って来たので、穂肥を出穂25日前に施しても下位節間が伸びず、穂と上位の葉（止め葉・第2葉）が伸びるので、安心してこの時期に穂肥を与えられます。慣行農法では、この時期のチッソは必ず下位節間を伸ばして、倒伏の原因となるので、1週間遅く、出穂18日前頃以降に穂肥を施すことになっていますが、それでは幼穂の生長に間に合いません。また、収穫時の米の品質を考えると、チッソを効かせてよいのは出穂25日前までです。もしこの後にチッソ肥料を与えると米にチッソ（タンパク質）が残ってしまい、食味が確実に低下します。

穂肥は、出穂25日前までに与えます。より早く穂肥を与えても問題はありません。



稲は葉が伸長すると同時に3枚下の葉から分ゲツが出ますから、この時期までは常に葉は3枚です。しかし7日ほど前に穂首分化と分ゲツ停止が起っていますから、母茎の葉が4枚になっています。（写真A）

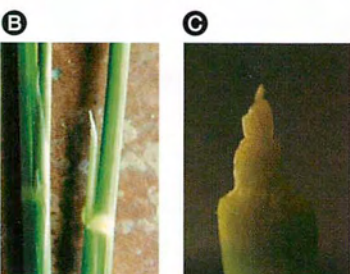
この時が出穂25日前です。これを目印にするのも良いでしょう。

新しい（4枚目の）葉が、前の（3枚目の）葉と同じ高さになった時、もっと厳密に言えば黄色っぽいエリ（葉耳の部分）の高さが並んだ時です。（写真B）

この時には、穂肥を施していなければなりません。

この時に茎を割って見ると、幼穂は長さ1～1.5mmです。（写真C）

この、目につかないほど小さな幼穂が、急激に生長するのに必要なチッソを、遅れないように補給するのが『穂肥』です。



この時は、幼穂の二次枝梗分化が終り、穎花分化が始まる時期ですから、1穂粒数を増やすのにチッソが必要です。また、この頃は、止め葉（第1節間）の分化期ですから、止め葉は強く、大きく伸長するようになります。

【穂肥の量】

穂肥の量は、通常は尿素3kg～4kgです。分ゲツ肥の肥効が続いていても、極端に葉色が濃いことはないはずですが、稲の葉色によって稲体内のチッソ量を推定して、尿素的施用量を調節します。

水稻の葉の色は「葉色板」(カラスケール)※で見ますが、2、3、4番の明るい黄緑色が標準で、この健康な稲の葉色は、6～7月頃の若々しい竹の葉色や、畦の雑草と同程度の色です。慣行農法でチッソ過多の稲の葉は、5、6番の黒っぽい濃緑色になっていますから、はっきり差があります。(モチ米のような葉色の濃い米は別です。)

※216p参照

葉色	(葉中チッソ濃度)	穂肥(10アール当り)
6 (特に濃い)	(4.0%以上)	(3kg+) ラクトバチルス100g
5 (濃い)	(3.3～3.5%)	3kg + ラクトバチルス100g
4 (普通)	(2.6～2.9%)	3kg
2～3 (明るい)	(1.5～2.2%)	4kg

- 穂肥は尿素(N=46%)を、特に推奨します。チッソ以外の成分は不要です。また、硫安などのアンモニアが土に吸着されて上根で吸収され、穂よりも葉や節間を伸ばすほうに効きやすいのに対して、尿素は土に吸着されず浸透性があるので、深い根から吸収されて、穂を充実させる働きがあります。
- 尿素に**ラクトバチルス**を混ぜて与えると、稲体に無機チッソは増えず(効き過ぎず)、アミノ酸として穂を充実させます。
- 倒伏の心配がない場合は穂肥を増やす事ができます。